



Title	『雨夜談抄』考：宗祇の『源氏物語』注釈態度を中心に
Author(s)	川渕, 紗佳
Citation	詞林. 2021, 69, p. 49-64
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79223
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『雨夜談抄』考

——宗祇の『源氏物語』注釈態度を中心に——

川渕 紗佳

一、問題の所在

『雨夜談抄』は、連歌師の宗祇が著した『源氏物語』の注釈書である。自筆本は確認されていないが、少なくとも二十五本の伝本と、三本の現代写本が現存する¹。その中でも、宮内庁書陵部蔵桂宮本や東北大学附属図書館蔵三春秋田家旧蔵本など一部の伝本は、次の奥書を有する。

文明十七のとし文月のはしめつかた児女子のために注し侍り さためてひか事おほく侍らむかし 宗祇在朝

傍線部によれば、文明十七年（一四八五年）七月上旬に『雨夜談抄』は成立した。これについては、次の『実隆公記』の記録と一致していることが既に指摘されている²。

抑今朝宗祇携^二帚木巻抄出新作一帖^一来、一見有^レ興。

（文明十七年七月七日条）

文明十七年七月七日の朝、宗祇が「帚木巻抄出新作一帖」を携えて三条西実隆のもとを訪れたとある。「帚木巻抄出新

作一帖」は、『雨夜談抄』を指すと考えられている。

この『雨夜談抄』は、書名からも窺えるように、『源氏物語』帚木巻を対象とする注釈書である³。雨夜の品定めとは、五月雨の夜に、宮中の宿直所で、光源氏・頭中将・左馬頭・藤式部丞によって交わされた女性談義を指す。『雨夜談抄』は全百十四注記のうち、八十三注記に及ぶ七十二パーセントを、この雨夜の品定めの注釈に割いている。宗祇の源氏学における帚木巻、特に雨夜の品定めに対する考え方を示している資料といえよう。

『雨夜談抄』に関する先行研究で特に重要なのは、伊井春樹氏と稲賀敬二氏の論である。伊井氏は、『花鳥余情』と比較しながら、次のように述べている⁴。

宗祇はより積極的に帚木巻の重要性を強調し、物語に占める序論的意義を明らかにしていた。帚木巻が〈物語五十四帖におよぼす〉というのは、換言すればこの巻に物語全体が集約されていることにほかならず、その認識

があるからこそ宗祇は品定めのことばの背後に、一人一人の女性を置いて読もうとする方法をとったのもあった。兼良は雨夜に語られた女性論が、法華經の三周説法を模したとの解釈のもとに、十八段の区分を示してその構造分析を試みた。（中略）これは兼良と宗祇の、読み

の方法をめぐっての根本的な相違とも言える。
稻賀氏は七毫源氏の書入注に、品定め十八段区分と、人物比定の双方の発芽が見られることを指摘した上で、一条兼良と宗祇の源氏学の関係性について次のように述べた。⁵⁾

十五世紀の現存する注釈書について見る限りは、両者を共に包含するものはなく、一つは兼良の流れに、一つは宗祇の流れにと別々に受けつがれて行っている。図式的には、十五世紀の源氏学の源流が十四世紀にあることがこの面からも確認できるわけである。

このように両氏は、帚木巻の注釈態度を通して、中世源氏学における兼良と宗祇の学問的な違いと、それぞれが担った役割を明らかにした。この他に、ノット・ジェフリー氏は、総じていえば『雨夜談抄』は、源氏学変遷史の有用な指標というより、『源氏物語』の「読み」の変革を伝える資料としての意義があろう。（中略）「作り物語」の「読み」を深める方向に舵を切ったのが、『雨夜談抄』であるといえる。

と述べている。⁶⁾なお、『雨夜談抄』が後発の注釈書に与えた

影響については、岩坪健氏の論がある。岩坪氏は、宗祇の源氏学において、

本文を詳細に解釈したのは帚木の巻だけに注を付けた『雨夜談抄』（一名『帚木別注』）しかない
と指摘し、帚木巻を中心に据えて考察した。⁷⁾

しかし、『雨夜談抄』は、他の注釈書との差異の指摘が主になっており、宗祇の源氏学全体を踏まえた、『雨夜談抄』の位置づけについては検討の余地がある。そこで、本稿では、『雨夜談抄』成立に至るまでの宗祇の源氏学の動向を再検討する。その上で、『雨夜談抄』の注記内容から、宗祇の源氏学について検証していく。

二、宗祇の源氏学の動向

まず、第二節では、宗祇の源氏学の動向を整理する。前節でも述べたが、『雨夜談抄』は文明十七年（一四八五年）七月月上旬に成立した。宗祇は、『雨夜談抄』成立前に、匂兵部卿巻から椎本巻に注釈を施した『種玉編次抄』などの注釈書を著している。この他に、東常縁からの古今伝授の終了、一条兼良との問答が行われていたことも確認できる。

宗祇は、『源氏物語』の注釈書を成立させるだけでなく、講釈なども行っていた。【資料1】では、三条西実隆の『実隆公記』の中から、宗祇の源氏学に関連する記事を列挙する。⁸⁾

【資料一】『実隆公記』から見る宗祇の源氏学の動向

文明九年 七月 十一日 早旦、於^二宗祇草庵^一有^二源氏第二卷講尺^一。

文明九年 七月 十二日 今朝、又有^二源氏講尺^一。

文明十七年閏三月廿八日 午後招^二宗祇、肖柏同来、源氏物語葵卷説^レ之。

文明十七年四月 三日 宗祇、肖柏来、源氏物語葵卷終^レ功。

文明十七年五月 廿八日 肖柏来、蓬生卷説^レ之。宗祇在^レ座。

文明十七年六月 廿三日 向^二大德寺、宗祇法師令^三誘^一引^レ之、今日^二簪木卷講^レ之。

文明十七年七月 七日 抑今朝宗祇携^二簪木卷抄出新作^一帖^一来、一見有^レ興。

文明十七年七月 十九日 宗祇来、乙女卷説^レ之。

文明十七年七月 廿三日 今日宗祇来、乙女卷説^レ之。

文明十七年七月 廿六日 宗祇来、乙女卷終^レ功。

文明十七年七月 廿八日 宗祇来、玉鬘卷説^レ之。肖柏同来。

文明十七年八月 七日 宗祇来、源氏物語講談。

文明十七年九月 一日 宗祇来、讀^二梅枝卷^一。

文明十七年九月 六日 宗祇来、若菜卷今日始而説^レ之。

文明十七年九月 十一日 宗祇来、源談如^レ例。

文明十七年九月 廿四日 宗祇来、源氏講尺如^レ例。

文明十七年九月 廿六日 源氏物語若菜下今日終^レ功、（中

略）宗祇、宗歡、玄盛等在^レ座。文明十七年十一月十三日 源氏夕霧卷肖柏説^レ之、宗祇在^レ座。

文明十八年正月 十一日 宗祇来、源氏物語竹河卷講^レ之。

文明十八年二月 二日 肖柏、宗作、元成等在^レ座。

文明十八年二月 二日 今日、宗祇所^二望桐壺卷^一終^レ書^レ功。

文明十八年二月 廿二日 宗祇法師来、昨夜上洛云々。源氏外題（^{親王御筆}方御筆）遣^レ之。歛喜無^レ極。

文明十八年六月 十日 今朝、源氏物語浮舟卷宗祇説^レ之。

文明十八年六月 十一日 源講如^二昨日^一。

文明十八年六月 十二日 源講如^二昨日^一、宗巧来聴。

文明十八年六月 十三日 源講如^二昨日^一。

文明十八年六月 十八日 源講今日終^二其功^一了、為^レ謝^レ之。

文明十八年八月 四日 晚頭向^二宗祇法師庵^一、種玉庵。

文明十八年八月 四日 抑宗祇新寫源氏物語外題^{五十四帖、}今日染筆了。

文明十九年二月 四日 源氏物語一部電覽終^レ功、系図之内不審所々粗加^二潤色^一。相^二談肖柏、宗祇等者^一也。

文明十九年三月 卅日 朝問宗祇法師来。古今集聊有^二申合之事^一。青表紙正本簪木卷令^二見^一之。

延徳二年十一月 四日 宗祇法師来、令^レ説^二橋姫卷^一。昨日此事所望了、不^レ及^二講尺^一只文

字読計也

明応元年十一月 十五日

今日、源氏物語論談事、兼日連々
支度之處。宗祇法師頻相催之間、
各問題四ヶ條書^レ之来会。午後始^二
其儀^一。

明応五年 十月 十一日

午後、宗祇法師来。源氏物語内不
審抄出持^二来^一之。聊有^二相談之事等^一。
藤原朝臣、心あき人のためそぎのけんも云事、あ
けまきの巻、うつろふかたやふかきなるんの哥心事、不^レ能
録^レ之。

明応七年 八月 十三日

宗祇法師等来、此間宗祇於^二草庵^一
源氏物語講談之由語^レ之。源氏表
紙事申^二付経師^一了

既に伊井春樹氏の指摘もあるが、文明九年七月十一日と十
二日の条から、宗祇は『雨夜談抄』成立よりも早い段階で、
帚木巻の講釈を行っていたことが分かる。文明十七年六月廿
三日の条も、帚木巻の講釈に関する記事である。但し、宗祇
の関心や講釈は、決して帚木巻に留まっていたわけではない。
『雨夜談抄』成立以前において、帚木巻の他に、少なくとも
葵巻・蓬生巻の講釈を行っていることが確認できる。『雨夜
談抄』成立後にも、乙女巻・玉鬘巻・梅枝巻・若菜巻・若菜
下巻・夕霧巻・竹河巻・桐壺巻の講釈を行っている。した
がって、宗祇は意欲的に『源氏物語』の複数の巻の講釈を催

したといえる。『雨夜談抄』は帚木巻のみを対象にした注釈
書であるが、宗祇の見識や関心は『源氏物語』全体に及んで
いた。

三、『雨夜談抄』の基本姿勢

『雨夜談抄』の注記内容から、その特性を確認する。まず、
一つ目の注記を取り上げる。この注記は、『雨夜談抄』の中
でも最も長く、詳細なものである。

【資料2】『雨夜談抄』

光源氏名のみこと／＼しういひけたれ給とかおほかなる
にいと、かゝるすきことともをすゑの世にもきゝつたへ
てかろひたる名をやなかさんと忍ひたまへるかくろへこ
とをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよ

〔此巻を帚木と名づくる事は源氏の君中川のやと
りへ方たかへになすらへておはしましたりしにうつ
せみのつれなくしてあひたてまつらすなりしかは
は、き木の心をしらてその原の道にあやなくまとひ
つるかなと読給ひしに女ふせやにおふる名のうさに
あるにもあらずなと返しにたてまつりし歌にてつけ
たる名なり 坂上是則かその原やふせやにおふる
は、き木のありとはみえてあはぬ君かなといへる歌
をとれる歌なり うつせみかありなからあひたてま

つらぬをありとはみれとなき心にみるなり

二〇此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也 其故は此物語はつくり事にてなき事にはあれとも又昔ありこし事ともをおもかけにしてかけるなり
 まつこの物かたりの桐壺の御門朱雀院冷泉院三代は延喜承平天曆のみかをとをかたり光源氏は西宮左大臣高明公の太宰にうつされ給しをなすらへたり
 このほか源氏の君の左遷にはもろこしの周公旦の東征し給し事白楽天か事我朝には菅丞相野相公在納言のためしをよそへたり これのみならずところ／＼に物をなすらふる事かきりなし されは五十四帖ごと／＼ある物かとみれはなくなき物かとすれはある物なれは此は、き木一部の名になる物なり ②天台に四門をたつる中にも亦有亦空門このものかたりにあたれり 夢のうき橋の巻もその一卷の名といへとも五十四帖の名になる物なり ③いかんとなれば此物語に上中下の人々もろ／＼の行跡みな夢のうちのたはふれなり たとへは莊子が夢に胡蝶となりしらす又胡蝶か莊子となるかといふかことし 此物語はいにしへの夢そともいひかたく此世にあるわれ人の今の身のうつゝともさためかたくとも夢のわたりのうきはしは、き木のありなしなり されはむらさきしきふの筆の跡その色ふかくその心はかりなき

物なり

三さて此巻のはしめに光源氏といふよりかた野の少将にはわらはれたまひけんかしといふまてはものかたりの作者のこと葉也 是のみならず紫式部のこと葉ところ／＼おほかるへし 名のみことごとくとは光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心なり いひけたれ給ふとかおほかるとは世にその名たかくみちのほまれある人をも世上にいひけつならひなり かゝるすきこと、もをすゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさんとしのひたまひけるかくろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよとは源氏の君は好色の人なからおもては実を本として下にはいろこのむこゝろまし／＼たるなり
 さるによりて世にしひたまふ事を誰かかたりつたへけんと紫式部かいふ也 さるは世をは、かりまめたち給ふけるほとなよひかにをかしき事はなくてかた野の少将にはわらわれたまひけんかしとは下の心は好色にして上に実をたつるゆへになよひたる所のなきを好色の本意にはあらずとかた野の少将はわらはむと藤式部か思ひてかけるなり 片野の少将の事色々の儀侍れと作物語にかたの少将といふあり その人かきりなき色このみなりき 光源氏とかたの少将とおなし時代にはあらねとも紫式部とりあ

はせかくいへるなり 作物語の人にてつくり物語の
人に対する事おもしろくかける物なり こゝまでは
此一巻の序分也

この一つ目の注記内容は、大きく三つに分けられる。〔一〕の部分、「此巻を帚木と名づくる事は…ありとはみれとなき心にみるなり」は、巻名の由来に関する説明である。源氏と空蟬が交わした贈答歌から、「帚木」という巻名が付けられたとする考え方は、今日の解釈とも通ずる。〔二〕で示した「此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也…その心はかりなき物なり」の部分は、『源氏物語』全体に対する説明である。そして、〔三〕の部分「さて此巻のはしめにこゝまでは此一巻の序分也」から、帚木巻冒頭の解説が行われている。ここで注目したいのは、〔二〕の「此巻の名なれとも此物語五十四帖にをよほす名也…その心はかりなき物なり」の部分である。『源氏物語』は、「なきこと（虚構の作品）」であるが、「あること（史実）」を元にして書いている。しかし、五十四帖全て「あること」があるのかと見れば虚構であり、「なきこと」と見れば元となる史実が見えてくるのだと説いている。この複雑な構造を、遠くからは見ることができが、近づくとも見えなくなるといふ特性を持つ、伝説上の植物の帚木と結び付けた。帚木という語を用いてはいるが、本質的には、これは『源氏物語』の全体論といえる。

この部分は、『河海抄』や『花鳥余情』から示唆を得て、説かれている。『河海抄』と『花鳥余情』が併せて享受されていた実態や、宗祇の源氏学の基盤として、『河海抄』と『花鳥余情』の二書があったことは、既に武井和人氏や松本大氏の先行研究で示されている。『雨夜談抄』でも、『河海抄』と『花鳥余情』の二書を積極的に取り入れていた部分があることが確認できる。【資料2】の本文にそれぞれ番号と傍線を付し、対応するものを、【資料3】から【資料6】で示す。

・①に対応する部分

【資料3】永青文庫本『河海抄』料簡

一物語の時代は醍醐朱雀村上三代に准する歟桐壺御門は延喜朱雀院是天慶冷泉院是天曆光源氏は西宮左大臣へ如此相当する也（中略）

難者云以前の准拠誠に其よせありといへ共此物語は光源氏をむねとする歟されは西宮左大臣に准する事一世の源氏左遷の跡は相似たれ共彼公好色の先達とはさしてきこえざるにや今の物語は殊に此道を本としたる歟如何 答云作物語のならひ大綱は其人の面かけあれとも行迹にをきてはあなかに事ことにかれを摸する事なし漢朝の書籍春秋史記などいふ実録にも少々の異同はある歟仍桐壺帝冷泉院を延喜天曆になすらへたてまつりなから或は唐玄宗のふるきためしを引或秦始皇の

かくれたる例をうつせり又天慶御門は相統の皇胤おは

しまさねとも此物語には朱雀院の御子今上冷泉院の御

後なし作被國云此條有光源氏をも安和の左相に比すといへ共好

色の事かは道の先達なるか故に在中将の風をまねひて

五条二条后を薄雲女院臘月夜尚侍によそへ或はかた野

の少将のそしりをおもへり又太上天皇の尊号も漢家に

は太公の旧躅本朝には草壁皇子等の先蹤を摸する歟是

作物語の習也

・②に対応する部分

【資料4】永青文庫本『河海抄』雲隱卷

一名はかりをきゝて巻をみぬ事

天台所立四教三藏教四教 南門 告身 非有 非空 門也

【資料5】松永本『花鳥余情』雲隱卷

抑卷の名はかりありて、詞をみぬ事は天台の四教の法門

を例に引たれと、なを物とをき心ちし侍り 俗書をもて

いは、毛詩の小雅の中に、南陔白華に黍由庚崇丘由儀

の六篇は篇の名のみありて、詩の詞はなし これは逸詩

といひて、もとは詞ありしかうせたるなり（中略）篇の

名のみありて、詞なき事は、雲かくれの名のみありて、

そのことはなきとおなしかるへし

・③に対応する部分

【資料6】永青文庫本『河海抄』夢浮橋卷

此卷名、師説如此聊又以愚案加潤色了 但再三案之真実

の義は夢の一字の外に別の心なし うき橋は夢にひかれ

て出来詞也 凡当流の義は諸事やすきをもて正説とする

故也 されは、本哥の世中は夢のわたりのうきはしかう

ちわたしつゝ、物をこそ思へといへるもうき橋に別の義

なし 定家卿の春の夜の夢のうきはしとたえしての哥も

同心也所詮作者の本意を推するに、此物語ははしめにい

ふかことくに、其趣莊子寓言に一同せり 而かの莊周は

胡蝶夢ニ死生の変をあかせり 是物化の謂也 且有覚

而後知其大夢ともいへり 漢家の寓言も百年の夢に化し

和国の寓言も一部の夢にきはまる也 花厳経には知一切

仏及与我心皆悉如夢と説り

①に対応する部分は『河海抄』料簡、②に対応する部分は

『河海抄』雲隱卷及び、『花鳥余情』雲隱卷、③に対応する部

分は『河海抄』夢浮橋卷の注記である。『雨夜談抄』の一つ

目の注記の〔二〕にあたる部分では、『源氏物語』がどのような

作品であるか、帚木という語を利用して述べている。ここで

注目すべきは、『河海抄』や『花鳥余情』の料簡や雲隱卷、

夢浮橋卷の注記を参考にしている点である。これらは、帚木

卷のみに注記を施すのであれば、必要とはいえない解説であ

る。しかし、宗祇は一つ目の注記で、帚木卷以外の注記を取り入れながら『源氏物語』の全体像を捉える注記を施した。

注釈書の序では、その作品における基本的な注釈姿勢や前提条件を端的に示すことがある。したがって、この一つ目の注記は、『河海抄』の料簡などを取り込んで、『雨夜談抄』の序的な役割を担っているといえるのではないだろうか。序は、著者自身が、その作品の意図や基本姿勢を記す部分である。

『雨夜談抄』の一つ目の注記からは、『源氏物語』全体に見通しを持って注釈をつけたという『雨夜談抄』の基本姿勢が確認できるのだ。

この一つ目の注記を、『雨夜談抄』の序とする捉え方は、『雨夜談抄』の一部の伝本からも確認できる。早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫蔵本では、一つ目の注記の「此巻を帚木と名づくる事は…その色ふかくその心はかりなき物なり」の部分を冒頭で示し、まさしく序と呼ぶにふさわしい体裁になっている。また、今治市河野美術館河野信一文庫蔵本では、「光源氏名のみことくしう…」の見出し本文が無く、一つ目の注記全体が、冒頭で示されている。一つ目の注記そのものを、序と考える『雨夜談抄』の享受があったと推察できる。

四、人物を比定する注釈態度

前節では、宗祇の『雨夜談抄』制作の基本姿勢として、『源氏物語』全体を見通した上で注記を施したことが確認できた。

この注釈態度は、『雨夜談抄』の特色である、帚木卷以後に登場する女性を比定し、読み解く手法からも見出せる。【資料7】では、人物比定の注記の中で、最初に位置するものを挙げる。

【資料7】『雨夜談抄』

かたちおかしくうちおほときわかやかにてまきる、ことなきとはかなきささひをも人まねにこゝろをいる、こともあるにをのつからゆへつけてしいつる事もあり見る人をくれたるかたをはいひかくしてさてありぬへきかたをはつくるひてまねひいたすにそれしかあらしとそらにか、はおしはかり思ひくたさん まことかともていくに見をとりせぬやうはなくなんあるへきとうめきたるけしきも

是は品さための第一なり 心は人のむすめのかたちをかしくわかやかなるやうの何にてもしいつるわさのあるをいふなり ゆへつけてとはしせんきようありてなり さやうなる人をそのかたなる人のことくしくいへるかみおとりする事あるよしをいへるなり 此段はすゑつむにあたるなり 末摘はよろつをくれたる所おはしけれと琴を引給ひしを大輔の命婦か源氏の君にかたり申たりし事よく似たるなり 又此段のはしめにかたちおかしくわかやかなるほと

といへり すゑつむはかたちあしき人也 ちかふやうなれとことく似る事はなれと一所なれと詮とする所へにたるをはそれにあたるといへる也

立項本文は、頭中将の発言の一部である。頭中将は「若い女性、一つの芸を身に付けることができる。世話をする人は、劣った面は隠して言わず、良い面をとりつくりつて伝える。そのため、男女の仲になると、がっかりしないで済むことはない」と慨嘆する。

この部分の注記で、女性比定の方法として、「一所なれと詮とする所へにたるをはそれにあたると説いている。異なる部分があるとしても、論点の主題と物語の内容がおおよそ似通っていると認められれば比定できるとしている。つまり、雨夜の品定めで説かれる女性論と、以後の巻々に登場する女性はずしも一致しないことを、最初に認めているのである。宗祇は、完全には一致していないとしても、似通う部分があると判断した女性を比定した。後の巻の展開を理解していたからこそ、具体的な人物を比定することができたのである。これは、宗祇が帚木巻の雨夜の品定めを糧として、『源氏物語』の全体像を想起させようと、考えていたからではないだろうか。『源氏物語』全体を見通した上で、具体的な女性を比定していたのは、他の人物を比定する注記からも窺える。

【資料8】『雨夜談抄』

つねはすこしそはくしく心つきなき人のおりふしにつけていてはえするやうもありかしなと

そはくしく心つきなきとは心の事にあらす みめかたちのよろしからぬ事をかくいへるなり まほなるかたちといふはよきをいへはそれに対してそはくしくはあしきなり こゝろつきなきとはかたちあしければ人の心につかぬ物也 かゝる人もおりふしいてはへするとはうちふるまひの心たてにて人にまさる事のある儀也 これには花ちるさとよくあたれるなり

左馬頭が、理想の妻は得難いことを語る場面の一部である。左馬頭は、「美人ではなく親しみが持てないような女の方が、何かしらの折りには、頼りがいがあるのだ」と述べる。

この部分に、宗祇は花散里を比定した。「美人ではなく親しみが持てないような女性でも、その人の振る舞いや性格によつて重宝される」という人物像と、二重傍線部「まほなるかたち」という文言は、【資料9】で示す箇所を受けた記述である。

【資料9】『源氏物語』少女巻⁽¹²⁾

とのほ、この西のたいにぞ、きこえ預けたてまつり給ひ

ける。「大宮の御世の残りすくなげなるを。おはせずなりなん後も、かく幼きほどより見ならして、後見おほせ」と、きこえ給へば、たゞ、の給ふまゝ、の御心にて、なつかしう、あはれに、思ひあつかひたてまつり給ふ。「ほのかに」など、みたてまつるにも、「かたちの、まほならずもおはしけるかな、『かゝる人をも、ひとは、思ひ捨て給はざりけりな』と、わが、あながちに、つらき人の御かたちを心にかけて、『恋し』と思ふも、あぢきなしや、心はへの、かやうに、やはらかならん人をこそ、あひ思はめ」と思ふ。（中略）大宮の、かたち、異におはしませど、まだ、いと清らにおはしまし、こゝにもかしこにも、「人は、かたちよきもの」とのみ、目馴れ給へるを、もとよりすぐれざりける御かたちの、やゝさだ過ぎたる心地して、やせ／＼に、御髪すくなゝるなどが、かく、そしらはしきなりけり。

光源氏は、息子である夕霧の後見役を花散里に頼む。引用した場面は、夕霧が花散里を批評した部分である。夕霧は花散里を「容姿は優れていないが、氣立ての優しい人」と評しており、【資料8】の注記内容と似通っている。

ここで注目したいのは、【資料8】【資料9】には「まほなるかたち」「容貌のまほならず」という同じ語を用いた表現が見られる点である。容貌に「まほなり」という言葉が用い

られるのは、『源氏物語』において花散里のみである。この点からも、【資料8】の注記が、帚木巻以降の巻の本文を踏まえて書かれていることが分かる。

似た事象が、次の【資料10】【資料11】からも窺える。

【資料10】『雨夜談抄』

すへてよろつのことなたらかにえんすへき事をは見しれるさまにほのめかしうらむへからんふしをもにくからすかすめなさはそれにつけてあはれもまざりぬへし

すへてといふはまへのあまたの事をもてかんようよかるへきやうをかけるなり 此段は紫上にあたれり
さるにより世にたくひなき人とはいへるなるへし

立項されている本文は、左馬頭が語る女性論の一部である。「女性は万事寛容であることが重要である。嫉妬はほのめかす程度に、恨みごとはそれとなく言う程度にとどめておくのが良い。それによつて、女に対する愛情も増すものだ」と語る場面である。

宗祇は、ここに紫上を比定し、「世にたくひなき人とはいへるなるへし」と説く。これは、【資料11】で挙げる『源氏物語』御法巻の本文を受けたものだと考えられる。

【資料11】『源氏物語』御法卷

致仕のおとゞ、あはれをも、折過ぐし給はぬ御心にて、かく、世にたぐひなく物し給ふ人の、はかなく亡せ給ひぬることを、口惜しく、あはれに思して、いとしばく、とひ聞え給ふ。

【資料11】は致仕大臣が、紫上を亡くした源氏を弔問する場面である。ここで、紫上は「世にたぐひなくものしたまふ人」と評される。『源氏物語』において「世にたぐひなき人」と評されるのは紫上のみである。宗祇はこの場面を踏まえて【資料10】の注記を施したと考えられる。

人物を比定する注記からは、後の巻の物語内部の表現を用いて、『源氏物語』展開を踏まえた上で注記を施したことが確認できる。帚木巻の「雨夜の品定め」に女性を比定したのは、物語の内部から後の巻を見出すのに、格好の糸口になると考えたからであろう。これは、前述した雨夜の品定めを、『源氏物語』の全体像を想起させるものという考え方にも通ずる。逆説的ではあるが、抽象的な複数人の人物像が語られ、そこに具体的な人物を比定できるのは、『源氏物語』においても、帚木巻の雨夜の品定めしかない。だからこそ、帚木巻のみに注記を施した『雨夜談抄』が成立したのである。

五、『源氏物語』の執筆姿勢に対する考え方

第五節では、『雨夜談抄』から『源氏物語』という作品の執筆姿勢に対する宗祇の考え方を検討する。第三節でも示した一つ目の注記の、【三】に当たる部分を確認する。

【資料2】『雨夜談抄』（二部、再掲）

光源氏名のみことくしうひけたれ給とかおほかなるにいと、かゝるすきことともをすゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさんと忍ひたまへるかろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよ

（中略）

【三】さて此巻のはしめに光源氏といふよりかた野の少将にはわらはれたまひけんかしといふまてはものかたりの作者のこと葉也。是のみならず紫式部のことと葉ところくおほかるへし。名のみことごとしくとは光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心なりいひけたれ給ふとかおほかるとは世にその名たかくみちのほまれある人をも世上にいひけつならひなりかゝるすきこと、もをすゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさんとしのひたまひけるかろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよとは源氏の君は好色の人なからおもては実を本として下にはいろこのむこゝろましゝたるなり

さるによりて世にしのひたまふ事を誰かかたりつたへけんと紫式部かいふ也 さるは世をは、かりまめたち給ふけるほとなよひかにをかしき事はなくてかた野の少将にはわらわれたまひけんかしとは下の心は好色にして上に実をたつるゆへになよひたる所のなきを好色の本意にはあらずとかた野の少将はわらはむと藤式部か思ひてかけるなり 片野の少将の事色々の儀侍れと作物語にかたの少将といふありその人かきりなき色このみなりき 光源氏とかたの少将とおなし時代にはあらねとも紫式部とりあはせかくいへるなり 作物語の人にてつくり物語の人に對する事おもしろくかける物なり こゝまでは此一巻の序分也

第三節において、『雨夜談抄』の一つ目の注記が大きく三つに分けられることを提示した。再掲したのは、三つ目にあたる、三「さて此巻のはしめにこゝまでは此一巻の序分也」の部分である。この部分では、帚木卷冒頭に対する注釈が施されている。注目したいのは、「ものかたりの作者のこゝと葉」「紫式部のこゝと葉とこゝ／＼おほかるへし」「紫式部かいふ」「藤式部か思ひてかける」「紫式部とりあはせかくいへる」と、作者について繰り返し言及している点である。紫式部が『源氏物語』を著したことを深く印象づけるような所作

である。『雨夜談抄』において、作者に對する言及は、八例あるが、その半数が一つ目の注記の後半部で使用されている。この後、宗祇の作者に對する捉え方が明文化されているのが、【資料12】で示す二つ目の注記である。

【資料12】『雨夜談抄』

また中将などにものし給しときは

源氏の君此巻にて十六歳官は中将なり 紅葉賀の卷に宰相にて中将もとのことし 花えんまでは中将なり しかれば此巻までは勿論中将なるをまた中将なとにものし給し時とかけること不審あるへき事也 しかはあれとかくかけるにこゝろあり その故は紫式部此物語をかく事わかつくりたるもののやうになさずして昔ありし事ともをたま／＼につたへき、し事をかきうつしなとしてとりあつめ一部にしたるやうにかけり さるほとに卷々のすゑおほくそれをあらはせり むかしの事にいへるものなれば中将なとに物し給ひしの過去のしうたかひなきものなり たとへは伊勢物語に業平の極官を貞観年中にかかるは彼物語業平没後に伊勢か、けるゆへに極官をかきし其たくひなり 此儀を分別すれば不審なき物也

『雨夜談抄』二つ目の注記では、物語の時間軸の変化に関

連して、作者の執筆姿勢が明文化される。傍線部では、紫式部が『源氏物語』を自分が創作したように見せず、昔の出来事を聞き及んで著したように書いたと説き、併せて、この物語創作観が、それぞれの巻末に反映されていると説いた。このような『源氏物語』の執筆姿勢は、『雨夜談抄』以前の注釈書では確認できない、『源氏物語』の創作に対する考え方である。これも、帚木巻のみに注釈を施すのであれば、必要な注記とは言い難いものだが、『源氏物語』全体を見通した際に、物語がどのように語られているかについても重要視したことが分かる。

「巻々のすゑおほくそれをあらはせり」と、巻末の表現を作者と結びつける注記は『花鳥余情』から確認できる。

【資料13】松永本『花鳥余情』夕顔巻
かやうのくた／＼しきことは

此一段は物語の作者の詞也御門の御子なりともよき事はよき事あしき事はあしき事にてあるへきを一かうにかきもらせはわたくしにやうなれはありのま、しるしをきたるとなり（後略）

【資料14】松永本『花鳥余情』末摘花巻
あないとをしかゝる人の御行すゑ　これは物語の作者
の詞末摘の事なり

【資料13】【資料14】は、夕顔巻と末摘花巻の最後の注記である。語り手が、巻末で物語を批評している部分を、作者の言葉としている。二つ目の注記で示された「紫式部此物語をかく事わかつくりたるもののやうになさずして昔ありし事ともをたま／＼につたへき、し事をかきうつしなとしてとりあつめ一部にしたるやうにかけり　さるほとに巻々のすゑおほくそれをあらはせり」という考え方は、宗祇が兼良と交流する中で獲得されたものであると推測できる。

この執筆姿勢について、兼良は『花鳥余情』において、前掲した資料以上の考え方は提示していない。しかし、兼良や宗祇の頃の源氏学において、作者が巻末の批評表現において物語上に現れるという説が提唱されていたことは確かであろう。

宗祇は、晩年の著作である『源氏物語不審抄出』でも次のように示している。

【資料15】『源氏物語不審抄出』桐壺巻¹⁵

いづれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかに
此いづれの御時にかとかけけるは伊勢か家の集のはし
めにいづれの御時にかありけんおほみやす所おはし
ましけるとかけり（中略）我身の事をも昔のやうに
かきなせり其心を紫式部思ひやるなるへしそうして
この物語をは我かきたりとみえぬやうにつくりなし

たる物なりまことにつくり物語の本意なるへし

ここで注目したいのは、『源氏物語不審抄出』では、桐壺巻冒頭部の注記において、物語の執筆姿勢について説いていることである。宗祇は、自分の著作の最初の部分で、『源氏物語』の執筆姿勢を示していた。つまり『源氏物語』を読み解く上で、この執筆姿勢が非常に重要であると捉えていたことが分かる。

六、まとめ

以上、『雨夜談抄』から検討した宗祇の源氏学について述べた。

宗祇は帚木巻を起点として、『源氏物語』全体を見通していた。その考え方が、反映されて作成されたのが『雨夜談抄』である。「雨夜の品定め」の背後に、帚木巻以後に登場する女性を比定していったのも、帚木巻を序として『源氏物語』全体を見渡す手法の一つだったのである。

また、紫式部が『源氏物語』を自分が創作したように見せず、昔の出来事を聞き及んで著したように書いたという執筆姿勢を初めて示したのも『雨夜談抄』である。そして、この説が宗祇の源氏学の中で重要視されていたことを、『源氏物語不審抄出』を挙げながら示した。

以上を踏まえて、『雨夜談抄』を、宗祇の『源氏物語』読

解態度を端的に窺える注釈書として位置づける。宗祇は、帚木巻を物語の内部から後の巻を見出す糸口とし、『源氏物語』全体を見通せる、帚木巻のみの注釈書を成立させた。また、『源氏物語』の執筆姿勢に対して、一つの説を明文化して示した。宗祇が『源氏物語』をどのように捉えるべきかを示した点に、『雨夜談抄』の本質は見出せる。

宗祇の著作の特徴として、一部の巻を対象とした注釈書や、不審な部分を集めて注釈を施したものが確認できる。宗祇の著作に対する論考は、他の注釈書と比較すると少ない傾向にあるが、彼の源氏学を捉え直すためには再度、検討することが求められる。特に兼良との関係性の見直しや、中世源氏学における位置づけについても作品の内部から検討できるだろう。これらは、今後の課題としたい。

注

(1) 中野幸一編『明星抄 種玉編次抄 雨夜談抄』（源氏物語古注釈叢刊第四巻、武蔵野書院、一九八〇年）では、底本に宮内庁書陵部蔵桂宮本を、校合本に国会図書館本を用いている。他に翻刻された資料としては、『続群書類従』がある（第十八輯下物語部・日記部・紀行部）。『雨夜談抄』の伝本調査の結果、大部分が一つ書きの形式を持つ伝本や、巻末に兼載の奥書を持つ伝本など、宮内庁書陵部蔵桂宮本とは異なる特徴を有する伝本も確認できた。諸本の異同と関係性については、今後検討する必要がある。稿者が確認した限りではあるが、注記内容に、解釈に影響するような

大きな異同がないことを踏まえ、本稿では前述した中野幸一編のテキストを主に用い、一部私に改めた。なお、現時点で所在が確認できている伝本を以下に列挙する。

- ・国会図書館本
- ・宮内庁書陵部蔵桂宮本
- ・宮内庁書陵部蔵兼載書入本
- ・宮城県図書館伊達文庫蔵本
- ・今治市河野美術館河野信一文庫蔵本
- ・和歌山大学附属図書館蔵本
- ・早稲田大学図書館伊地知鐵男文庫蔵本
- ・東海大学付属図書館桃園文庫蔵伊達家旧蔵本
- ・東海大学付属図書館桃園文庫蔵一面十行書本
- ・実践女子大学図書館黒川文庫蔵本
- ・龍谷大学図書館写字台文庫蔵本
- ・東北大学附属図書館蔵三春秋田家旧蔵本
- ・京都大学附属図書館蔵本
- ・安田女子大学図書館稲賀文庫蔵本
- ・金沢大学附属図書館成賞堂文庫蔵本
- ・石川武美記念図書館成賞堂文庫蔵本
- ・天理大学附属天理図書館蔵一面八行書本
- ・天理大学附属天理図書館蔵一面十五行書本
- ・天理大学附属天理図書館蔵吉田文庫蔵本
- ・九州大学附属図書館蔵本
- ・陽明文庫蔵本
- ・神宮文庫蔵本
- ・静嘉堂文庫蔵本

・本居宣長記念館蔵本
・松本大氏所蔵本
また、現代写本は以下の通り。

- ・国文学研究資料館初雁文庫蔵本
 - ・東海大学付属図書館桃園文庫蔵西下經一本
 - ・東海大学付属図書館桃園文庫蔵大島雅太郎氏旧蔵本
- (2) 伊井春樹『雨夜談抄』と『源氏物語不審抄出』（『源氏物語注釈史の研究 室町前期』桜楓社、一九八〇年）。なお、『実隆公記』の本文引用は、続群書類従完成会編『実隆公記』（太洋社、一九五八年—一九六三年）を使用し、便宜上傍線や、句点を施すなど、稿者が改めた部分がある。
- (3) 『雨夜談抄』は、『帚木別注』と称されることもある。この『帚木別注』は、宗祇晩年の著作である『源氏物語不審抄出』帚木巻の「この巻は始終ともにその心得がたし然る間一冊別のも有」という記述を受けたものであり、後に施された名称だと考えられる。したがって、書名は『雨夜談抄』を用いた。
- (4) 前掲注(2)。
- (5) 稲賀敬二「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」（『源氏物語の研究 物語流通機構論』笠間書院、一九九三年。初出「品定め十八段区分の源流と展開―兼良・宗祇の源氏学の周辺―」『国語と国文学』五十二巻十一号、一九七五年十一月）
- (6) ノット・ジェフリー「『源氏物語』が語るもの―宗祇『雨夜談抄』が開拓する「読み」とその意義」（『国際日本文学研究集会会議録』二〇一五年三月三十一日）
- (7) 岩坪健「『覚勝院抄』の成立過程―穂久邇文庫所蔵本をめぐって

て―」（『源氏物語古注釈の研究』和泉書院、一九九九年。初出「三条西家の講釈―穂久邇文庫所蔵『覚勝院抄』をめぐる―」『親和国文』第二十七号、一九九二年十二月）

(8) 前掲注(2)。

(9) 前掲注(2)。

(10) 武井和人『一条兼良の書誌的研究』第二節「花鳥余情」（桜楓社、一九八七年。初出「『花鳥余情』の成立・統貌」『言語と文藝』第九十六号、一九八五年一月）

松本大「宗祇『花鳥余情抄出』の位置付け」（『むらさき』五十号、二〇一八年十二月）

(11) 『河海抄』の引用本文は、熊本大学附属図書館蔵細川家永青文庫本を、『花鳥余情』の引用本文は、『松永本 花鳥余情』（源氏物語古注集成第一巻、桜楓社、一九七八年）をそれぞれ使用し、便宜上傍線を施すなど、稿者が改めた部分がある。

(12) 『源氏物語』の引用本文は、宮内庁書陵部蔵三条西家本を底本とする日本古典文学大系を使用し、便宜上傍線を施すなど、稿者が改めた部分がある。なお、引用本文は、肖柏本などでも大きな異同が確認できないことを稿者は確認している。

(13) 『源氏物語不審抄出』の引用本文は、『源氏不審抄出』（ノートルダム清心女子大学古典叢書、福武書店、一九八二年）を使用し、便宜上傍線を施すなど、稿者が改めた部分がある。

（かわぶち・すずか 本学博士前期課程）